

## 2020年度教員による授業相互参観実施状況報告書

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
法学部	【法律学科】全専門科目 【政治学科】専任教員全科目 【国際政治学科】専任教員全科目	【法律学科】3科目 【政治学科】2科目 近年実施している「公共政策フィールドワーク」および「現代政策学特講Ⅰ(千代田区)・Ⅱ(沖縄県)」の授業相互参観は、新型コロナ禍の影響で、それらの科目自体の中止を余儀なくされたため、行うことができなかった 【国際政治学科】2科目	<p>【法律学科】コロナ禍で急遽授業のオンラインを迫られ、各教員が授業方法を模索しながら自分の授業を行うことに精一杯であり、他の教員の授業を見学するに至るまでには相当に時間がかかった。それでも、資料配信型の講義1科目の資料閲覧を行った教員によれば、学生へのポイントの示し方や、学生の復習に役立つ資料の作成方法を学んだとのことであった。また、録画配信型の講義1科目の閲覧を行った教員によると、録画授業の場合のスピードや論旨の展開、画面上でのホワイトボードの利用など、録画配信型授業の方法を学ぶ上でも有益であったとのことである。さらに、ZOOMでのリアルタイム型講義を見学した教員によれば、20名程度のリアルタイム講義でも教員が作成した詳細な資料や、学生が議論するのにふさわしい事例が入念に準備され、かつ、リアルタイム型で多くの学生との意見交換を行いながら展開する講義形式に学ぶことが大きかったとのことである。</p> <p>【政治学科】春学期に6名の教員がリレー形式で担当した「政治学の基礎概念Ⅰ」、および秋学期に8名の教員がリレー形式で担当した「政治学の基礎概念Ⅱ」においては、オンライン授業という形態ながらも、各教員が動画教材や音声付き教材等を学習支援システムの「課題」欄—教員によっては動画共有プラットフォームなど—にアップし、それらを他の教員が視聴することにより、担当教員間で、学習課題についての知見、考察・分析手法、教授法を相互に知ることができた。</p> <p>また、1年生向けの「政治学入門演習」(7クラス開講)においては、担当教員全員が提出された夏休み課題レポートにアクセスできる共同ファイルを構築し、担当教員間で他クラスの学習成果を確認し合うことができ、教授法の理解を深めるのに有効であった。</p> <p>【国際政治学科】国際政治学科の1年生が全員履修する「国際政治への案内」は、本年度も複数の専任教員が担当し、これから国際政治を学ぶにあって様々な学問的なアプローチがあることを講義した。特に今年度はオンライン授業の特性を活かし、レジュメやスライド資料、講義内容をテキスト化した講義録などの授業教材を学習支援システムを通じて全員が共有し、教員間で講義内容を確認しながら授業を実施した。また、必修科目である「Hosei Oxford Programme (HOP)」では、海外研修の代替措置として、7～8名のグループごとにネイティブ・スピーカーによるプレゼンテーション指導を5回実施した。授業最終回に実施した学生によるグループ・プレゼンテーションでは、多くの学生が臆することなく英語での発表を行い、ネイティブ・スピーカーによる指導の効果を確認できた。</p>	<p>【法律学科】オンライン授業の見学は必ずしも容易ではないが、授業の見学や資料・録画の閲覧を希望する教員が確実に参加出来るような態勢を整えることが次年度の課題である。</p> <p>【政治学科】中止を余儀なくされたが、複数の専任教員で担当する「公共政策フィールドワーク」および「現代政治学特講Ⅰ(千代田区)・Ⅱ(沖縄県)」を—いぜん新型コロナ禍という不確定な要素はあるもの—実施し、受講者の事前学習やフィールドワークの成果報告に各教員がコメントを行ない、そのことにより、担当教員間で、学習課題に関する知見、考察・分析手法、教授法に関する知識を相互に深める。大学を離れて行う現地調査授業である「公共政策フィールドワーク」および「現代政策学特講Ⅱ(沖縄県)」においては、教員が受講生のフィールドワークに付き添いながら、頻繁に意見交換を行う。とりわけ「現代政策学特講Ⅱ」は成果報告書を作成するが、そこに担当教員が記載する総合評価は政治学科の全教員が目を通すことができるので、これはぜひ行ないたい。</p> <p>また、1年生向けの「政治学入門演習」(次年度は8クラス・8教員態勢で開講予定)では、テキストの選択や授業の進め方等について、学科会議以外にも懇談会等を設け、一層の相互理解を深めていく。</p> <p>以上の課題に取り組むことにより、今年度は2科目にとどまった授業相互参観の科目数を増やし、その内容も充実させていく。</p> <p>【国際政治学科】国際政治学科の初年度教育をさらに充実させるために、2021年度より1年生を対象とする「国際政治ワークショップ」を開講する。同科目は5名の教員が担当し、タイムリーな国際政治問題をテーマとして講義とグループワークを組み合わせた授業を行い、最終的に各グループによるプレゼンテーションを実施する予定である。また、「国際政治への案内」も2021年度より授業回数が増える。これらの科目の内容を検討・実施していくことを通じて、教員間の意見交換を深め、問題意識の共有と課題解決の方途を検討していきたい。また、学習の定着を促すためにも、少人数制で行っている実践科目や演習についても相互参観を進めたい。</p>
文学部	41科目(当初予定科目36科目+追加実施5科目)	10科目	<p>例年通り、5月に公開科目を一覧表にして、専任教員に配布した。感染症の影響で、今年度は春学期には参観を行わず、秋学期のみの実施となった。</p> <p>授業相互参観が実施されたのは、学部全体で10科目、参観者は(延べ)61人であった(昨年度は実施9科目、参観者18名)。従来、教員間の参観日時の調整等が難しいことが参観実施の大きな課題になっていたところ、授業のオンライン化に伴ってオンライン上での参観が可能となり、授業方法や教材活用の相互確認・情報共有がなされると共に、ある科目への継続的な教員の参観も行いやすくなり、参観の人数・方法に広がりが見られたことが今年度の大きな特徴である。また、FDミーティングにおいても、学生に関する情報共有のほか、オンラインによる授業手法やその課題・問題点などの検討と意見交換が各学科で積極的に行われ、教員間でその結果が共有されたことは重要な成果であった。さらに、英文学科では、前年度から継続して、科研費プログラムを通じた学科教育向上の取り組みが行われているが、それでも、オンライン授業の方法や課題に関して具体的な手法や工夫が検討されるなど、有意義な進展があった。</p>	<p>【哲学科】 ・FDミーティングの協議結果を、来年度の授業運営により積極的に活用する。特に、通常授業が開始されたのちもオンライン授業の方法を一定程度活用することで、対面授業参加の困難な学生等に対してより柔軟な対応が可能とならないか、さらに検討する。</p> <p>【日本文学科】 ・対面授業とオンライン授業の両立のしかたについて、随時、兼任講師も含めた意見交換会を設ける予定である。</p> <p>【英文学科】 ・引き続き様々な単位で定期的にFDミーティングを開催し、コロナ禍での対面授業・オンライン授業・ハイフレックス授業に関して情報共有と意見交換を実施していく。</p> <p>【史学科】 ・引き続きミーティング等で学生の状況について情報共有に努めたい。</p> <p>【地理学科】 ・FDミーティングは随時行われている一方で、授業相互参観の実施科目数は増えていない。今後は実施科目と参加者数を増やすことができるように学科で努めたい。</p> <p>【心理学科】 ・次年度も引き続き担当教員間の情報共有や意見交換を継続し、さらなる授業改善を図る。</p> <p>【文学部共通科目】 ・2021年度はzoomを活用したオンライン形式で開講するため、対面式と異なる授業時間の配分を検討する必要がある。また、レポートの方式も例年とは異なる形で行うよう再考しなくてはならない。 ・科目の特性上、アクティブラーニングを行う講義回が多数となる。大規模授業である文学部共通科目をオンライン形式で実施するためには、委員間および委員と講師との十分な意思疎通と事前準備が必須となる。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
経済学部	71科目	8科目	<p>(1)実施方法 ①公開方法 経済学部専任教員は各担当科目のうち原則1科目は授業相互参観科目とする。 ②参観方法 経済学部所属教員は、所定の期間内にあらかじめ参観申込をしたうえで授業参観することとする。 ③公開期間 2020年11月30日(月)～12月3日(木) (2)授業実施者へのフィードバック等 参観申込み者には、執行部まで①授業担当者に対する感想、②授業相互参観制度に関する意見・感想の提出を依頼した。①授業担当者に対する感想については、授業担当者本人にフィードバックを行った。</p>	<p>(1)公開科目数に対して実施科目数が少なかったため、実施時期直前の周知を工夫し、実施期間の延長等を検討し、実施科目数を増やし、経済学部の教育力の向上を図ることが今後の課題である。 (2)兼任講師を含めた授業参観の対応については、今後、検討していきたい。</p>
社会学部	全開講科目	16科目	<p>①オムニバス型の授業での実施(3科目) 教員間で、授業の方法や内容に関する打合せを行っている。参加した教員にとって、今後の授業運営の参考となっている。 ②本学部ゲスト講師制度を利用した外部講師を招いての授業をとおした実施(12科目) オンライン上で外部講師を招聘し、その授業を参観するだけでなく、外部講師との意見交換を行った。授業方法や内容に関して、刺激を受けることができた。 ③専任教員担当の授業に別の専任教員をゲスト講師として招く形での実施(1科目) ゲストとなる専任教員に専門的なテーマで話をしてもらい、担当教員とゲスト教員と学生たちとで議論を交わした。</p>	<p>授業相互参観を含めた教員間の交流を通して、授業の方法・内容のさらなる改善を図ることを促す。 また、オンライン授業が大半を占める今年度は、ゲスト講師制度の利用が昨年度より減少している。オンライン上でも招聘が可能である旨のアナウンスを強化し、対面・オンラインに関わらず、積極的な利用を促したい。</p>
経営学部	原則として専任・兼任・兼任教員による講義授業とし、演習等の小規模授業は除く。ただし、公開するかどうかは各教員の自由に委ねた。	0	<p>① 実施方法 今年度は新型コロナウイルス感染症への対応のため、公開科目の大半がオンライン授業となり、オンデマンド形式の授業も多く、授業相互参観を実施できなかった。かわりに毎月の教学問題委員会において、各講義のオンライン化状況を相互報告した。また、メッセージプラットフォームSlackを利用し、他学部および他大学からの兼任教員も含めて多くの実例を共有した。 ② 効果 オンライン授業に不慣れな教員が多い中、授業の開始に先立ち教員全員に対して講義の方法などを共有する機会を設けることで、前例のない状況の中でも円滑に授業を進めることができた。また、従来の「授業相互参観」では得られなかった兼任教員からのフィードバックを得ることができた。</p>	<p>・コロナ禍による授業のオンライン化により、従来の「授業相互参観」の実施によるフィードバックは得られなかった。 ・今後は、オンラインによる学生面談、各種プラットフォームを利用した教員間の情報共有など、他の取り組みとも連携し、withコロナ、afterコロナを想定した学部教育のあり方について議論を進め、理解を深めたい。</p>
国際文化学部	専任教員が担当する全科目	17科目(春学期13科目、秋学期4科目)。ただし、同一科目名で曜日・時限の異なるものは複数科目とした。	<p>春学期、秋学期ともに、教員から「参観をすすめる授業の科目名・曜日時限・教室・公開時期」を募ったのち、オファーのあった科目をリストにして教授会で共有し、相互授業参観をよびかけた。 コロナ禍のもとでのオンライン授業で、相互授業参観はそもそも可能か、また実施すべきか、というところから出発したのが2020年度の実情であった。暫定的な解決策として、リアルタイムオンライン授業に限定して、相互授業参観を呼びかけた。従来型の教室における対面授業に、最も近い授業形態と思われたためである。しかしこのことも一因となり、公開科目数は減少している。 授業を参観した教員からは、例年通り、授業運営における具体的なヒントが得られた、自分の授業を振り返り、考えることができた、などの回答が寄せられた。</p>	<p>オンデマンド型に代表される収録済みのコンテンツも多くなる中、「相互授業参観」というコンセプト自体も見直すべき点があるかもしれない。FD活動として本質的なのは、授業にかんする「相互批評」「ノウハウの共有」であると考えられるならば、教室における対面授業や、リアルタイムオンライン授業のみを対象とするのではなく、オンデマンド型も含めた全科目の質の向上を目指す方向で「相互授業参観」の仕組みを考えるべきかもしれない。また、さまざまな情報の取りまとめについて、手作業を減らす方向でICTをもっと活用すべきであると感じた。</p>
人間環境学部	全科目	11科目	<p>▶1年生の春学期全員必修授業「人間環境学への招待」では、5つのコースごとにそれぞれ2名程度の教員が各自の専門性を踏まえた講義を行っている(合計21名)。この形は自ずと、総合コーディネーター(3名)と各回数担当者相互の「授業参観」の意義をもつ。一つのテーマに沿って教員間のディスカッション形式で行う場合もあり、お互いの専門分野の見地、講義手法を理解しあう、新鮮な機会となっている。 ▶例年、このオムニバス型の「人間環境学への招待」に加えて、現地実習プログラム「フィールドスタディ」も「授業参観」の対象としているが、今年度はコロナ禍によりいつもの方式が実施できなかったため、“withコロナのFS”と称した一部の「共同企画」以外では授業参観にカウントすることは出来なかった。 ▶上記に加えて、5つのコース(「ローカル・サステナビリティ」「グローバル・サステナビリティ」「サステナブル経済・経営」「人間文化」「環境サイエンス」)で、春学期後半から秋学期にかけてZoomリアルタイム授業の中から1つのコースに2科目ずつ、計10科目の授業を、主として着任が最近の若手教員担当という観点から選び、互いに授業の方法を見学しあった。今年度は当然、オンライン授業の工夫について相互の刺激、啓発の機会となった。</p>	<p>“withコロナ”の授業配慮を継続し、大学・学部の方針に準拠して各教員の裁量で選ばれる授業形態において、オンラインの場合は2020年度の経験を活かしてより効果的な方法を、そして対面授業の場合は、オンラインと有効に組み合わせた“ハイフレックス”や“ハイブリッド”の工夫に努めていく。 「対面／オンライン」の単純な二項対立の視点ではなく、どちらの長所・短所もふまえて、授業形態の「ニューノーマル」としてコロナ後も見据えて質保証にとりくんでいくことが肝要と考え、2021年度は特に上記の「ハイフレックス」「ハイブリッド」が、授業参観の大切なポイントとなるだろう。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
現代福祉学部	本学部専任教員の担当科目(ただし、演習・実習科目、情報・調査系科目、言語コミュニケーション科目、その他、担当教員が公開を希望しない科目を除く)	3科目(以下の実施方法ごとに1科目)	<p>〈実施方法〉 今年度は、オンライン授業が基本であったため、以下の方法で相互参観を実施した。 ①外部招聘講師によるZoomでの講義の視聴と質疑応答参加 ②学生のグループワーク発表会(Zoom)の視聴と評価 ③オンデマンド型授業で配信された教材の視聴確認</p> <p>〈得られた効果〉 ・外部講師に対して、経営の視点から鋭い質問を投げ掛けながら、地域づくりの要点を浮き彫りにしている点は、学生にとって多角的な視点を養う機会となっている。 ・予選を勝ち抜いた学生グループによるパワーポイントでの発表に対して、評価基準が明確に示された中で全員が投票を行い、その評価結果が学生たちに公表されており、発表する学生や視聴する学生にとっても意義深い授業となっている。 ・通信環境が整っている学生にはYouTube動画を、そうでない学生には解説テキスト付きのPDFデータを提供している。 ・授業の冒頭に「本日の講義の目的」「最終的に考えてほしいこと」を示して、そのテーマに対して関心を持つような工夫がされている。</p>	今年度はオンライン対応に全教員の意識が振り向けられたので、思うように授業相互参観を実施できなかった。しかしながら、オンラインだからこそ、授業参観が容易になり、さらに教材の視聴や確認も可能となった。今後は、オンライン授業の特性を活用する形で相互参観を促して、教育方法や授業内容の質を高めていくことを目指したい。
情報科学部	全科目	8科目以上	本年度は、新型コロナウイルス感染症の広がりにより、急遽オンライン授業に切り替えた関係で、多くの授業で、授業方法について共有するための授業相互参観が実施された。実施科目数に現れない相互参観も多数あったものと推測する。相互インタラクションしながらのオンライン授業方法についての情報共有のほか、参観結果に加えて、期末に実施した学生アンケートを基に、授業改善方法について教員と討議するなど、授業実施方法の改善に大きく寄与できた。	2021年度は新たにハイフレックス型授業を実施することから、その授業方法について積極的に授業相互参観を進める。プログラミング科目については、オンラインとオンデマンドを併用した履修方法にシフトするため、課題も多いため、授業相互参観を強く勧める。この他、例年通り、複数教員の共同実施科目を中心に授業の相互参観を行い、相互の情報共有をはかる。
キャリアデザイン学部	0科目	0科目	本年度は新型コロナウイルス感染拡大への対応のため、やむなくオンライン授業へと授業の実施形態を切り替えたことから、教員による授業総合参観は中止とした。	2021年度は一定数の授業が対面での実施となるが、感染拡大防止の観点から、実施の可否は慎重に見極めていきたい。
デザイン工学部	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建築学科 16科目</li> <li>・都市環境デザイン工学科 学科主催の全科目(他学科学生との混成クラスを除く)</li> <li>・システムデザイン学科 5科目</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・建築学科 16科目</li> <li>・都市環境デザイン工学科 17科目</li> <li>・システムデザイン学科 5科目</li> </ul>	<p>・<b>建築学科</b> 従来より建築学科においては、1年次から4年次に至る全てのデザインスタジオ科目をはじめ、卒業研究・卒業設計において、全クラス合同の講評会を行い、兼任を含む教員が相互に他の科目やクラスの内容について理解し議論できるようにしている。さらには、公開の講評会により学内外に対して学習成果を公開し、学外からの評価を受ける機会を設けている。 2020年度は、大学院建築学専攻と合同で、デザインスタジオの全作品(自由参加)の専任教員、兼任教員、学生によるオンライン・バーティカルレビューを開催し、学科内IAEサーバーでも公表している。 以上に加え、スタジオ科目、フィールドワークおよび修士設計、卒業設計での優秀作品と、卒業研究の梗概を、それぞれ学科発行誌「法政大学スタジオワークス」、「建築研究」に掲載することで達成状況を共有している。また、年度末には、全スタジオ(デザインスタジオ1～11、造形スタジオ、構法スタジオ、デジタルスタジオ)の専任・兼任教員が一堂に会し、相互参観の感想を基本とした設計教育の振り返りと、新年度方針について討議する機会を設けている。 一方、各授業での活用資料や学生の学習成果はもれなくサーバーに蓄積されており、これを学生の自習のため、あるいは教員の授業改善また相互参観のための参考資料として閲覧できる仕組みを設けている。</p> <p>・<b>都市環境デザイン工学科</b> 毎年授業のビデオ撮影を実施している。今年度は遠隔で行われたZoom映像記録のアドレスや授業の録画映像を学科共有のディレクトリにアップロードし、当該教員および他の教員も視聴できるようにした。</p> <p>・<b>システムデザイン学科</b> PBLを基本とした必修授業を開講し、全教員が参加して学生の指導にあたっている。学生は、課題をもとに作品制作を行い、企画、中間発表、試作、成果発表の各段階で教員がフィードバックを行い、全教員が参加して講評する場を設けている。今年度は、新型コロナウイルスの影響ですべてオンラインにより実施し、画面共有を行いながら学生の成果物に対して講評することで意見交換を行い、相互チェックを行った。授業中はチャット機能を用いて学生と教員間の情報共有を行い、コミュニケーションを図ることができた。このような共同指導体制とすることで、授業プロセスや課題の進捗状況を全教員が把握し、学生からの作品制作に関わる質問を共有して、適切にアドバイス、指導を行うことができた。</p>	<p>・<b>システムデザイン学科</b> 今年度のオンライン型授業は、従来の対面型のPBL授業に比べ、学生は自宅で時間を効率よく使い集中して課題に取り組み、同時に多くの教員のフィードバックが得られるメリットがあった。しかしその反面、教員は作品を手に取り作りの詳細を確認できないため、指摘の漏れが生じる危惧がある。作品の完成度の確認方法や意見・評価の伝え方などを工夫し、オンライン授業においても学生にわかり易く伝えることが課題である。</p>

学部名	公開科目数	実施科目数	本年度の報告【まとめ】(実施方法・効果など)	次年度への課題
理工学部	650	31科目	<p>1.実施時期 主に2020年度秋学期  2.実施方法 以下の2通りを実施した。  a)個別授業相互参観  ・コロナ禍ということで、オンライン実施の授業も対象とし、収録動画なども活用の上、柔軟に実施した。  ・専任教員は、全ての担当科目を原則として、期間内授業相互参観可能な科目とする。  ・専任教員は、担当教員に連絡の上、所定期間内は自由に授業参観をすることができる。ただし、授業運営の支障とならないように、特に配慮する。  ・相互参観希望者は、科目担当教員と事前に、科目、曜日、希望参観時間(15分～90分 任意)を調整し、教室内等で参観する。  ・参観した専任教員は、参観報告書(委員会提出用及び担当教員提出用)を記入し、各学科担当委員及び科目担当教員に、個別に提出する。  b)学科に特化した柔軟な運用による公開(学科別)  ・学科別にa)とは別の形式で、学科独自の柔軟な運用を含む授業相互参観について検討・実施する(例 PBL、実験・演習、複数教員担当形式授業、研究室配属説明会、卒業・修士論文中間発表会を用いたプレゼンテーション能力の検討等)。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・授業相互参観の実施率の向上及び個別の授業参観報告書のフィードバック方法の検討</li> <li>・客観的な授業改善に関するチェックを簡易的に行えるシステムの検討(報告書含む)</li> <li>・兼任講師を含めた、全授業における授業相互参観を継続</li> <li>・参観授業数を増やすこと</li> </ul>
生命科学部	春学期 52 秋学期 90	春学期 10(参観回数10) 秋学期 8(参観回数12)	<p>生命科学部では、今年度、春学期(6月29日～7月18日)と秋学期(11月9日～12月5日)の2回、授業公開を実施した。春学期については新型コロナの影響を考慮し専任教員のみを対象として実施したため、公開科目数は昨年度と比べると約半数であった(2019年度春学期:95科目、2020年度春学期:52科目)。結果的に、今年度の実施科目数は昨年度と比べ、半数以上減少した。この理由として、コロナ禍で教員のオンライン授業の準備やその対応の負担が大きく、時間が取れなかったのではと考えられる。授業参観者アンケートの自由コメント欄では、やはり初めてのオンライン授業を行う上でとても参考になったという意見が見られた。</p>	<p>実施科目数が昨年度と比べ減少した。オンライン授業の質の向上のためにも、来年度は参加を促す必要がある。来年度に向けて、これまで参加していなかった教員にも参加してもらった新たな方策が必要である。</p>
グローバル教養学部	2(春0, 秋2)	2(春0, 秋2)	<p>春学期は、ほぼ全教員が初めてオンライン授業をすることとなり、どの科目でも学生の声を反映しつつ試行錯誤しながら授業を進めていたため、相互参観は実施しなかった。代わりにオンライン授業に関するワークショップと意見交換会を専任・兼任教員の双方を対象に複数回行った(春7回:4/21, 4/22, 4/23, 5/13, 5/20, 7/3, 7/8)秋3回:9/11, 9/14, 11/18)。また、秋学期は、新規採用の専任教員とオンライン授業に不安のある教員に対してオンライン授業の参観を行い、後日該当教員にフィードバックし、カリキュラム委員会にも報告をした。授業参観の機会は限られてしまったが、各教員の取り組みをワークショップで共有することで、オンライン授業の質は向上したと言える。</p>	<p>通常の対面授業と、本年度のオンライン授業に加え、次年度はハイフレックス授業が増える可能性が高い。新規採用教員の科目を参観する他、兼任教員を含めたFDワークショップや意見交換会などを開催する。</p>
スポーツ健康学部	全科目	16科目	<p>本年度はオンライン授業実施に伴い、相互参観しにくい状況であった。</p>	<p>次年度は対面授業を増やすことやオンライン授業でも参加するように積極的に呼びかけを行う。</p>
市ヶ谷リベラルアーツセンター	全科目	11科目	<p>ILACでは、①授業相互参観(従来型)②授業参観による研修(新任教員対象型)③セルフ授業参観(録画記録によるセルフレビュー型)④教員相互授業情報交換会の4つをFD活動として位置付けており、2020年度はコロナ禍でありながら、11科目で実施した。</p>	<p>今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、オンライン授業を導入せざるを得なかったが、次年度以降はオンライン授業による教育効果の適正化を検証しつつ、オンライン授業の質保証をどの様に担保していくのかが、課題である。</p>
SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート)	全科目	未実施	<p>新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、急遽、オンライン授業に変更せざるを得なかったため、本年度は実施出来なかった。</p>	<p>2021年度については、対面もしくはオンラインであったとしても、計画的に実施していく予定である。</p>